

随想

手帳



愛知淑徳中学校教諭

大竹基久

大人を顧客の軸としている比較的規模の大きな文具店を歩いていると、領収書や納品書、仕入帳や売上帳などが並んでいる棚のあたりに、あまり一般人々が手に取ることもない手帳を見つけることがある。罫線の種類によって名称は様々だが、ここ数年私が愛用しているものは、40枚の3ミリ方眼が頑丈に糸綴されており、濃い緑色の表紙に控え目な金文字で「SKETCH BOOK」と印字されている。

新書よりひとまわり小さい片手に収まるサイズで、厚さも1センチに満たないが、何よりも表紙が硬い厚紙できているのがいい。どんな場所であっても、そのときどきに発見したことを自在に記録することができるのだ。そもそも

は屋外で仕事をする人々を想定して製造販売されているものらしく、10冊単位の梱包には「測量野帳」というシールが貼られている。発掘に携わる人も同種の手帳を使用すると聞いたことがある。

ふだんの日程管理には、日付・曜日の入ったA5判の日記帳を使っているのだが、そこには仕事の予定と行動の記録しか記していない。新聞・雑誌の抜書きや、書物を読んで考えたこと、あるいは自然や他者との交流を通して感じたこととは、すべてこの手帳に書き込むことにしている。これまでの10冊ほどを見てみると、野の花のスケッチや未完の俳句が残されているものもある。切り離しができないので、すべてが残される。

日付のない、ある日の新聞の抜書きを紹介しよう。《朝日新聞より。行司新三役となった木村しげたか氏は57歳。行司の番付は、立て行司の木村庄之助・式守伊之助が頂点。三役はその次で、ようやく土俵上で草履をはくことが許可される。年功序列の世界のため、先輩が死ぬと赤飯を炊くとか。定年まで7年。角界に入って46年目》。先輩が死ぬと赤飯を炊く」の部分が丸で囲ってある。

それぞれが思い出深いメモではあるが、この手帳を紛失しても日常に支障をきたす訳ではない。記録のすべてを薄型の電算機に依拠していた頃には味わうことのできなかつた心境である。